

「まねる」は呼吸でいえば『吸う』行為にあたる。きちんと吸わないと、「制作」という形で『はき出す』ことはできない。

～以下、<フロントランナー「アートとしての書」に挑む : 書家 柿沼康二さん> (朝日新聞 13.2.23) より～

見る人が見れば、その創造的な作品群が、実は膨大な枚数の、古典の「臨書」に裏打ちされたものであることは容易に推察できる。臨書は、名筆をかたわらに置き、気が遠くなるくらいの時間をかけて、ひたすら書き写す作業だ。「細部まで目を配り、よく考えながら筆を動かす。何万回と向き合ううちに、やがて書き手の気持ちまで推測できるようになる」それはある意味、「まねる」作業でもある。だからなのか、「まねるのがうまいのが書家か、それは芸術か」としばしば尋ねられるという。しかし、たとえ臨書であっても、毎回まったく同じものを書くことは不可能だ。「実は毎回創造をしている。その感覚的な違いを突き詰めていくと、最終的に個性になる」自らの歩む道を語らせると、こう強調した。「**古典の臨書は、呼吸でいえば『吸う』行為にあたる。きちんと吸わないと、制作という形で『はき出す』ことはできないんですよ**」

柿沼康二 (かきぬま・こうじ) さん (42)